
手乗り魔女と異世界からきた弟子

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手乗り魔女と異世界からきた弟子

【Nコード】

N2542Y

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

僕のお師匠はとてもかわいい。

どうかわいいかって言うと、食べれそうならいかわいい。

どういう意味かは想像に任せるけど。

妖精種だから手のひらサイズで、大きくなっても十歳ぐらいで、一人称が名前で、ワンピースの丈は短くて、表情がコロコロ変わるかわい人だ。

そんなお師匠を愛でたりお世話するのが僕の役目。彼女がいれば、

違う世界でもまあ、何とか生きていける気がしている。

一応、帰る方法はあるらしいけど帰る気はない。ずっとお師匠と一緒にがいい。

——これは念願の弟子がかわいくて仕方が無いサイズ小さめのお茶目な魔女と、そんなお師匠を愛玩するのが趣味な異世界出身のお弟子さんの、ごくごく普通の日常を適当に書いてみた何かである。

1. お師匠はかわいい

僕のお師匠の名前はセウだ。妖精種だから、とても小さい。蝶のような形の、少し透けて光っている羽を持っている。その羽がある時は、だいたい手のひらに収まるほどの大きさだ。

何でも、妖精種が持つ背中の中は、彼らの魔力の塊らしい。

だから優秀な魔法使いに妖精種が多いのは、生まれ持つ魔力の量が他と比べて桁違いだからということなのだという。まあ、姿を容易に変えられる種族なのだから、当然ともいえる。

羽がないと、少女と言われるぐらいの大きさだ。本当の姿というわけではないが、小さい方が身体に負担がかからなくて楽なのだそう。妖精種はとても大変なんだ、とお師匠は言う。

確かにそよ風にさえ少し飛ばされかけているのを見ると、大変なのは理解できる。

とはいえ、魔法の実験をするときは、羽を消して大きい姿になる。さすがに強風に飛ばされるような小さい姿で、すり鉢で材料を砕いたり、大釜の中身を混ぜるとかはムリらしい。

そんなお師匠は、窓際の一番好きなポジションで読書中だ。

もちろん小さい姿で。

時々、その青い瞳を星のようにキラキラさせている。ちなみに、熱心に読んでいるのは魔法書じゃなく、恋愛小説らしい。わざわざ魔法で、小さい姿でも読めるように縮めている。

表情がコロコロ変わるお師匠は、見ていて何だかほえましい。

全体的に、お師匠は白い。そして薄青い。

白いのは服で、髪や瞳は薄く青い。

瞳の色は少し濃くて、肌はとっても色白だ。

手足はほっそりしていて、でも柔らかさのような感じがする。もちろん見た印象で、実際は分からない。触ったことがないし……握ったことはあるけど。突風に飛ばされかけてた時に。

お師匠はいつもひらひらしたワンピースを着ている。すぐくぺらぺらで、普段着というより寝巻きのような感じだけど、この辺はあまり寒くならないから、薄くても問題ない。

けれど、目に毒だ。

ワンピースの丈はとても短くて、太ももが半分以上露出している。少し風が吹くとめくれてしまいそうで、というかめくれるようで、お師匠は風が吹くといつも必死に抑えていた。

あまりに強いと、僕のところまで転がるように飛んできて、そのまま服の中に入る。ちよつと寒いときもそうやる。まるで猫のようだ。かわいい。撫で繰り回したくなる。

もちろん、そんなことをしたら、機嫌を損ねるのでないけれど。でも、ちよつと脳内でやってみるだけなら――。

「弟子くん、どしたの？　なんか――やにやしてるよー？」

「いえ、何でもありません」

今日もお師匠はかわいい。

とりあえず、今日のおやつはお師匠が好きな焼き菓子にしよう。

きっと喜んで、笑ってくれるはずだ。

僕が好きなあの笑顔を、浮かべてくれるはずだ。

2. 秘密の日記帳

特にやることも無いので、すっかり散らかった机を整理していたときだ。

「やあやあ弟子くん、何みてたのー？ それなあにー？」

びゅーん、とお師匠が飛んできた。

そのまま器用に身をひねりつつ速度を落とし、僕の右肩にちょこんと座る。

彼女は、僕が作業の手を止めて読みふけていたものに興味津々のご様子だ。そういうところは子供のようでかわいいなあ、と思いつつ、口や顔に出さぬよう心の中に片付ける。

「別に、ただの日記……っばいものですよ」

「ふーん」

お師匠はあまりこういうのに興味はないらしい。

日々の実験などの記録は、それこそ重箱の隅に穴を開ける勢いで書くけれど、日記とか呼ばれるようなものは一切。普通は、こういうのは女の子ほどやりたがる気が、僕はするけど。

僕も元の世界ではそう興味はなかった。

ただ、なんとなく書き記したいから書いているだけ。この世界はいろいろと、元の世界と理屈が違っていることが多いから、そういうのを忘れないようにメモするためでもある。

それと、お師匠の前では『よくできた弟子』でありたいから、そういう地道な努力はあんまり見せたくなかったり。所詮、ただの『かっこつけ』というヤツだった。

「セラはね、そんなものを書かなくても平気なの。記憶力だけはば

「つちりーだもん」

ふふん、と自慢そうにいうお師匠。

実際にお師匠は、かなり優秀な魔女の一人だ。

時々、昔通っていた魔法学校で、教鞭までとっているらしい。確かメルフェニカという王国だった……と思う。世界でも有数の、魔法を重用している国なんだと聞いた。

ちなみにここはメルフェニカに接する隣国……らしい。

師匠はあまり国というものに興味が無いのか、メルフェニカ以外の国の名前はさっぱりわからない、と言っていた。加えて家主が歩かないこの家には地図もない。

そんなわけで僕は、自分が暮らす土地の名前も何も、実は知らなかったりするのだ。

「まあいいや。それよりも今日はねー」

くるんくるん、と僕のすぐ前を旋回する。

彼女の薄青い長髪が、目の前で美しい残像を残した。

「シフォンケーキを作ったんだよ！ セラのお手製のさー」

「……ああ、さっきから甘い香りしてましたね」

「お疲れの弟子くん、ぴったりだと思うんだよね、セラは。それでね、せっかくだからおやつの時間にしようと思ってね、セラは弟子くんを呼びにきたわけだったりするんだよね」

早くおいでー、と飛び去っていくお師匠。

僕はノートを机のすみにおいて、キッチンに向かった。

3. 激甘党と甘い人

お師匠の家――アトリエは二階建てだ。

二階に僕とお師匠の自室と、書斎と物置がある。一階にはそれ以外の生活スペース、台所だとかリビングとか。それからいろんな実験などをするための部屋。それに使う道具の置き場。

庭は結構広くて畑もある。僕が勝手に作った、家庭菜園スペースだ。時々、普通の大きさになったお師匠が、キラキラした目で若葉を見ていることがある。

「早くおいしいのたべたいね、弟子くん」

そんな風に、にこにここと笑って。

それからご機嫌な様子で、畑の上をくーるくーる、と飛び回る。

「ねえねえ弟子くん、これとかそろそろ食べられるんじゃないかなあ」

指差すのは大きく広がる緑色の葉だ。

根菜類らしく、見た目はニンジン以外の何者でもない品種だったと思う。甘く煮付けたものを食べたことがあるけれど、味も大体同じような感じで、ほっこりとおいしかった。

この世界の食物は、見た目は元の世界とあんまり変わらない。お師匠が作ってくれるサラダにはレタスのような野菜が使われているし、柑橘系のドレッシングがあったりもする。

「セラはね、弟子くんのお料理が好きだよー。また何か作ってよーう」

「じゃあ……シチューにしますか」

小麦粉や牛乳、バターは存在しているから、できないことはない。一度、家庭科か何かの教科書の記憶を頼りに作ったけれど、それなりにおいしくできてお師匠は大喜びだった。あのもったりとした甘さが、好みにストライクだったらしい。

わあいわあい、とまるで子供のようにはしゃいでいる。

「木に引っかからないようにしてくださいね」
やっと開花したんですから、と僕は苦笑した。

お師匠が飛び回っている畑の一角には、柑橘系の果樹が植えてある。

見た目はオレンジ色のレモン……という感じだ。

切ってみると中身はともレモン。香りもだいたいレモン。この世界では柑橘類を料理などによく使うらしく、どこの家にも一本か二本は植えてあるとお師匠は言った。

すでに家の脇には品種の違う果樹が、十本ほど植わっている。季節ごとに花を咲かせ実を抱き、食卓に彩を添えてくれているようだ。

僕はとりあえず、手近なところにあるハーブを摘む。昼食に作るサラダにかける、ドレッシングの風味付けに使うためだ。それと、毎日欠かさないオヤツにも使う。

最近クッキーが続いたから……今日はスコーンにでもしようか。まあ、僕がスコーンと勝手に呼んでいるだけで、実際はそれによく似た見た目と食感のお菓子なんだけれど。

ちょうどジャムを作ったばかりだから、それをつけて食べるのも悪くない。

「甘くしてねー、とっても甘いほうがいいよー」

「はいはい」

ご機嫌に庭の散歩を続けるお師匠に背を向け、僕は家に向かって歩き出す。

まったく、お師匠の甘い物好きも困ったものだ。

実験の合間にお菓子。

食後にもお菓子。

寝る前にもお菓子。

とにかくにもお菓子お菓子お菓子。

僕が元いた世界に連れて行ったら、大騒ぎするだろうな。

あっちに移住すると言いつても出さずかもしれない。魔法なんてものが存在しないとしても、甘味物の前ではきつと些細な問題だ。移住しなくても、再現しろと言われるかもしれない。

……まったく、お師匠の甘党にも困ったものだ。

だけでもし、お師匠をつれてあの世界に戻れたら。

僕はきつとその手を引いて、ありとあらゆる甘味物を食べさせるんだと思う。

不恰好なお菓子にも、おいしいねえと笑ってくれるあの人のためなら、どんな出費も苦勞も問題ではない。お師匠が笑ってくれたら、それだけで僕は満足。

相変わらず僕はあの人に甘いなあ、と苦笑した。

4. 掃除の後はお茶会をしよう

「世界を操る魔法の指輪ってのに、興味はあるかい？」

ある日、お師匠はそんなことを言い出した。

ああ、いかにもゲームのアイテムみたいなのだなあ、と思ったのは秘密。

「むかーしだけどね、そういうのを研究してるのがいたらしいんだよ。どうやらこれに、ただの指輪にそういう魔法を宿す何か書かれていんじゃないんだよね。マユツバだけど」

お師匠は、珍しくヒトの姿をしていた。そして、鈍器のような厚さの本を抱えている。あまりに重そうにしているので、僕はお師匠が本を落としてしまう前にさっと受け取った。

中に書かれている文字は見事なまでに、読めない。

一応、この世界の文字は大体読めるようになった……のだけど。

「あ、それふるーいふるーい魔法文字だから。さすがのセラも読めないの」

「じゃあ何でこんなのを……」

「セラが買ったんじゃないよう。セラの師匠の蔵書なのー」

書庫の整理中なんだよ、とお師匠は腰に手を当てて得意げに胸をそらせた。

普通、小さいヒトが大きくなる場合、グラマラス……とはいかないでも、女性なら年頃というか妙齢といって差し支えない感じになるのが、よくある『お約束』だと思う。

しかしお師匠は、どこからどうみてもツルーンだ。

出るところは出ていない。へこむべきところはへこんでいる。

とてもスレンダー。

誰がどう見てもこう思うだろう。

——赤いランドセルがとっても似合いそうだね、と。

まあ、それがいいんだけど。かわいいし。

「僕も手伝いましょうか？」

「いいよー、地下の書庫は危ないものー。弟子くんは……そうだ、お菓子作って」

「お菓子ですか？」

「うん。セラね、疲れちゃったから、もう少ししたらお茶したいの」
「……わかりました。でも、何かあったらすぐに僕を呼んでくださいよ」

「わかってるー。あのねあのね、セラ、今日はパンケーキがいいの！」

「了解です」

楽しみだなー、とお師匠は地下の書庫とやらに戻ろうとして。

「ねえ、弟子くん。世界を操れたらどこに帰りたい？」

振り返って、そんなことを訊いてきた。少し、寂しそうに微笑んで。

僕はここではない違う世界からやってきた。それをお師匠が拾ってくれて、弟子としていろいろと教えてくれた。たぶん、その気になればもう一人で生きていけると思う。

お師匠は訊いた。どこに行きたいでもなく——帰りたい、と。

世界を操る力があれば、僕が元の世界に帰れるんじゃないかと……そう思っているのか。

ねえ、お師匠。

うぬぼれてもいいんでしょうか。

あなたが寂しそうにしているのは、僕と離れたくないと思ってい

るから。

仮に僕が帰りたいといっても、それを叶える知識を自分が持っていないから。

だから寂しそうなんだって、うぬぼれてもいいですか？

「僕が帰りたいのは、ここですよ」
指差すのは自分の足元だ。

「僕はここがいいんです。あなたのそばがいいんですよ、お師匠。元の世界に帰れる日が来ても僕はあなたのそばにいる。僕がいるべきは、あなたのそば以外には存在しない」

「……そっか」

「お菓子、たくさん用意しておきますからね」
今度は僕が背を向ける。

鼻をすする音が聞こえたのは、きっと気のせいだ。

5. 開く、かもしれない

お師匠の家には地下がある。

人を殴り殺せそうなほど大きな錠前が、十個ほどついた扉の向こうに。

何が恐ろしいって、そこには鍵穴が存在しないんだ。穴がない、鈍器として運用可能な錠前だけが、十個ぐらいつらりと並んでいる奇妙な扉だ。はっきり言って意味がわからない。

飾りかと思ってたいたら、向こう側へ音が響いていた。

扉の向こうが、空洞になっている証だ。

なぜ地下とわかるかという、あの扉と錠前の意味を尋ねたことがあるから。

「あそこはね、セラの師匠のけんきゅーしつなの。それから書庫ね」

という、意外な言葉が返ってきた。

「あの人は昔、【古魔法】っていう魔法式を研究しててね。あの扉の向こうで、その実験をしたみたいなんだ。って言っても、そのころのセラは学校にいたから知らないんだけどね」

あはは、と笑うお師匠。

お師匠の師は、ここで研究に明け暮れていたそうだ。

そしてある日――ぽっくりと、なくなってしまったんだという。

彼――男性だったらしいその師の弟子はお師匠だけで、彼が遺したものはすべてお師匠が相続することになった。

身内はいたかもしれないけれど、魔法使いでなければ使い道がないものも多かったという。

その中に、この家があった。

地下の、研究室があった。

一人の魔法使い——魔法師が、理想を抱いて追い求めた研究が残る場所が。

「でもね、師匠が研究してた【古魔法】って理論が文献にもほとんど残ってなくてさ、不安定ですごく危ないんだよね。だから弟子くんも、不用意に地下に入っちゃ駄目だよ」

「はい」

「魔法のせいで空間とかねじれててさ……いや、多分意図的に捻ってるんだろうけど。ありえない広さだったりするんだよ。シロウトさんは迷うだろうし、そうなると一発アウトかもね」

と、少し怖いことを言ってから。

「魔法のお勉強が進んだら、案内してあげるね」

なんて、お師匠は笑った。

つまりお師匠は、あの部屋を使っているということなのか。

「そだよ。本当の本当に危険なじっけんとか書物は、みんなそこに収めてあるの」

「へえ……」

「いくら弟子くんがゆーしゅーでもね、セラは危険な薬品とかを弟子くんがうっかり触らないように気をつけているわけー。いい子でしょ？ セラはいいおししょーさんでしょ？」

「ええ、僕にはもったいないぐらいですよ」

小さな頭を指先でなでる。

お師匠はうれしそうに目を細めて、もっともっと、と僕に擦り寄った。

ああ、かわいい。

「弟子くんがもっともーっとすごい魔法使いになったらね、一緒に書庫で本を読もうね」

と、お師匠は笑っているけど、悲しいことに僕が誇れるのは知識の記憶力だけ。魔法の方は本当に初歩の初歩の初歩しか使えない。ひらがなの『し』とか『つ』だけ書ける感じだ。

普通、こういうシチュエーションの場合、何らかの要因で天才的な才能を授かってもいいとおもうんだけど、あいにくと話す言葉を理解するだけにとどまっている。

……当分開く気がしないとは、ご機嫌なお師匠には言えなかった。

6. かわいいドラゴン

森の中にまるーく切り開かれた場所があって、その真ん中には家がある。

それがお師匠のアトリエだ。

たぶん、空から見たらものすごく目立つと思う。この周囲の森はかなり広範囲で、地元じゃ樹海とか言われてるらしい。その中にまっすぐ、古い街道が通っている。

お師匠のアトリエはその旧街道から、少し外れたところにあった。

「こんちゃーっす。毎度おなじみ『魔女宅配』でーすっ」
元氣そのものといった声が聞こえ、続いて。

「はいはいはーい、今いくようー」
と、お師匠が答える声がする。

週に一度の恒例行事。

二階の廊下から下を覗くと、おさげの女の子が見える。この世界でよく使われる宅配サービスの最大手、その名の通りに魔女――女性や少女しかいない『魔女宅配』の社員だ。

確か年齢は僕より下だったはず。中学生ぐらい。

赤茶色の髪を、無造作に二つに分けて三つ編みにしている。何度か話をしたけど、師匠に負けず劣らずの明るい少女だ。僕より年下なのに、いくつか縁談もあるらしい。

とはいえ本人は仕事をしていたいらしく、片っ端から断っているそうだけでも。

「いつもいつもわるいねー」

「いえいえー。じゃ、頼まれてたブツはここにおいときますねー」
懐から先端に飾りのついた、いかにもな魔法のスティックを取り

出し、彼女は宙をかき混ぜるように何度かクルクルと回した。描かれる見えない円の中央に、光が集まっていく。

その光に『あそこに行け』というように、杖の先端を家の玄関のそばに向けた。

すると次の瞬間、そこに木箱や袋がドーンと出現する。

魔法で特殊な空間にしまっただけであるらしいのだけど、いつ見てもすさまじい。

「あ、預ける荷物はあれだよ」

お師匠は庭の隅に積み上げた荷物を指差す。昨日、僕が必死に運んだものだ。

中身はお師匠が調合した、魔法に使う触媒というやつ。お師匠は調合した触媒を売ることと生計を立てている魔女だ。僕がイメージするほど、魔法は簡単なものじゃないみたいだ。

まず魔法には触媒というのがいるし、触媒には魔素と言うものが必要になる。魔素はそこら辺でも普通に売られているらしいのだけれど、触媒は基本的に自分で手に入れるしかない。

そこらの石とかも、魔素さえあれば触媒になるそうだし。ただけど更なる効果を求めるなら、それ専用に調合しないといけない。

石を砕いて混ぜ合わせたり、草をすりつぶして混ぜ合わせたり。それを魔法には影響がないノリのようなもので固めて、丸く団子状にする。……で、それを箱詰めして出荷するんだ。

調合にはレシピがある。

さながら名店のソースやスープのように、門外不出の貴重品だ。簡単な調合レシピなら市販されている書物に載っているそうで、一流はそれを自分専用に改良するのだという。

お師匠が作っているのは、一般向けの適度に力を押さえ込んだ触媒だ。

要するに、全部買ってきて済ませてしまう、本職の魔法使いじゃない人用。ランプとかキッチン用品などで結構使われているらしい。乾電池みたいなものだろうか。

ちなみに『魔女宅配』は元が商家で、出荷したブツはその場でお金に変えてもらえる。

「さすがセラさんですねー、これならちょっと割り増しサービスです」

「わーい」

と、いつもより多めにお金をもらっていた。

お師匠が作る触媒は、質がいいので評判なのだという。

「では、またのご利用をー!」

彼女はひらりと軽やかにードラゴンにまたがった。ホウキじゃない。あれは間違ってもホウキと読んでいいものじゃない。お師匠もかわいいドラゴンだねー、とか笑ってるし。

というか、かわいいのだろうか。今にも炎を吹きそうなのが。確かに飼い主になでられてネコのようにゴロゴロ喉を鳴らしているのは見たけど、一軒家サイズをかわいいとはとても。

この世界の魔法は、やっぱりなんかおかしい。

7. ひよこ

孵ってしまった。

ひよこが。

食用の卵が——じゃない。

お師匠が、誰かから預かったタマゴが孵ってしまった。まあ、窓際の日当たりのいいところにおいてあったら、孵りも思うと思う。問題は、それが何のヒナなのかわからないことだ。

見た目はひよこだ。

ふわふわだ。

「弟子くん弟子くん弟子くん！　ふわふわだよ！　もふもふだよ！」

と、お師匠のテンションが振り切れるくらいには。確かに一匹、かごから逃亡を図ったのをとっ捕まえたけれど、ずっとにぎにぎしていたいぐらいに、ふわふわのもふもふだった。

手のひらだけでこんなに気持ちいのだから、さっきから十羽ほどの黄色い塊の中に埋もれているお師匠なんてまさに天国だろう。ちよっとうらやましい。

ああ、でもつつかれるのはノーサンキュー。

とりあえず僕はお師匠を、毛玉の中からつまみ出して。

「それでお師匠、いつまで預かるんですか？」

「そのうち引取りに来ると思うよー」

それまでムフフー、と再び黄色の毛玉に突撃するお師匠。

楽しそうだ。

まあ、見た目はただのひよこだし。後にどんな身の丈に育つか知

らないし、多分知らない方がいいような気がするけれど、とりあえず今は安全で人畜無害のようだからほっとこう。

僕はお師匠の笑い声を聞きながら、台所へと向かう。

飼い主が残っていたメモには、万が一にも孵化してしまった場合も書かれていた。要するにエサなどの世話の仕方だ。幸いにも、エサはそう面倒なものではないらしい。

基本的にはレタスとかキャベツみたいな、あの手の野菜を与えればよいようだ。朝食に使った残りがあるので、それを細かく手でちぎってお皿に持った。乾燥ハーブも忘れない。

そういえば、食用の家畜にハーブなどを入れたエサを食べさせて風味をつける、なんてテクニックがあるらしいのだけれど、これもその一環なのだろうか。

中途半端に似通った世界に、僕は時々戸惑う。食べ物の一見ただ目こそ微妙に違ったりしているのだけれど、名前は同じだし。まるでそれはそういう名前と決められているようだ。

誰が決めるんだよ、と心の中でつつこんで、僕はエサを手に取りリビングに戻る。

「ふあふあだよ……はふう」

そこには、昇天しかかっているお師匠がいた。

しばらくして毛玉たちは、元の飼い主に引き取られていった。

その後、食用のタマゴに抱きついて暖めようとしていたお師匠に對し、僕はそのタマゴでおいしい目玉焼きを作ってあげたりしたけれど、それは別に語るまでもない話だ。

8. 世界のレシピ

ずっと気になっていたことがある。

それは、二つの世界——僕が元いた世界と今いる世界の、奇妙な共通点だ。

わかりやすいところで言うなら、食べ物と呼称。

実はほとんどというのも無意味なほどに、変わらない。

オレンジみたいなレモン、なんてものはあるけれど、基本的に僕から見たレモンはお師匠から見てもレモン。チーズやバターもあるし、牛乳も飲まれている。

一度、差し入れされた都のスイーツなんて、元の世界のソレと何が違うのかわからないくらいに生クリームだった。おいしかったし、味も僕が知る生クリームと変わらない。

食べ物だけじゃなくて、たとえば時間の数え方や距離の単位も同じだ。

さすがに暦はちょっと変わってたけれど、でも『月』のような区切りがあって、ひと月三十日になっていたりする。生活はしやすいのだけれど、偶然も積み重なると薄気味悪い。

まったく理からして異なる二つの世界。

それなのにどうして、こんなにも共通する部分が多いのだろうか。……という話をしたら、お師匠は妙に興味を示してくれた。

『セラの知り合いにね、世界について研究している変わり者がいるんだよ。パメラ・シエルシュタインと言ってね、かの一門にその魔女ありと言われる不老の魔女さ』

お師匠の知り合いでもあるそのパメラという魔女の仮説の中に、僕の話と互いに参考にし合えそうなものがあるという。むしろ、僕

の証言が仮説を裏付ける可能性もあるそうだ。

その仮説とは――世界にはあらかじめ用意された素材がある、ということ。

それを神様と呼ばれる何者かが、その時々気分や目的で組み合わせているんな世界を作り上げているのではないか、という……まあ、かなりぶっとんだ仮説だった。

だけでもしそうなら僕の話に、それらしい説得力ができる。

レモンはああいう形で、味ということが、あらかじめ素材の中に入っていたなら。

「……面白い話だけど、証明しようがないしな」

僕以外の、僕とは違う世界からの来訪者でもないなければ。

とはいえゲームとか小説でもないのだから、そんな都合よくポンポンと飛んでくるわけがないのだから。結局、仮説は仮説のまま……ということになるんだろう。

僕だってどうしてこうなっているのか、いまだによくわかっていないのだから。

ただ恐ろしいほど古い古い魔法には、世界を世界を渡り歩くなんて記述が残るものもあったりするという話だし、そういうのを使えば帰れる……かもしれないね、なんて感じで。

しかし方法の手がかりはあるけれど、肝心の魔法式はさっぱりわからず。

お師匠曰く、【召喚式】というヤツの応用じゃないか、とのことだけれど何をどうすればいいのかというレシピは、いまだ見つかってない。そんな魔法があったという記述だけだ。

……まあ、一番の問題は、アレだ。
僕に帰る気がないことなんだろうけれど。

9. 起きたらそばに

ひどい夢を見た。

誰か知らないけれど、かなり体格のいい誰かに、のしかかれる夢だ。ひどいにもほどがあるというか、苦しいので勘弁してくださいと言いたくなる夢だ。

こういう場合、身体の上に何かが乗っているという。

……本だろうか。

いや、確実に本だろうな。

寝る前に読んでいた。魔法のあれこれ書いてある本だ。僕はまだ見習い以下で、読んでいる本は本来ならずと小さい年頃の子が見るような内容らしい、けれどもかなりぶ厚い。

魔法に関してはまるっきり未経験ゾーンで、知らないことが多すぎる。だから寝る間は惜しまないけれど、できる限り知識をためようと僕なりに努力しているのだけれど。

重い。

こう……ずっしりとした重みがある。さっさと目を開けて起きてしまえばいいものを、二度寝したくなってしまう僕は、そんな当たり前の選択肢を蹴り飛ばした。

変わりに、重さを撤去するために腕を動かす。

ここでも目を開ければいいのに、睡魔が飛んでいきそうで開かない。

さらい、としたものに触れた。

……糸だろうか。

それにしても束のようにたくさんあるし、長いし、つやつやして

そんな感触だ。びっくりするほど指通りがいい。シルクの表面のよ
うな感じがするから、絹糸もこんな感じだろうか。

さすがに本ではないことを理解し、僕は渋々まぶたを上げる。
薄青いそれが、僕の胸の上にあることを知った。

「……」

なんで、いるんだ？

一瞬で目が覚めてしまった。

むしろ覚めすぎて、軽く頭痛さえする。

「……お師匠？」

そこには、ヒトの姿のお師匠がいた。十歳くらいの少女だ。羽は
ない。彼女ら妖精種の羽と言うものは魔力的な何かの塊らしく、そ
れを消すと十倍以上に身体を大きくできるという。

なお、羽は元の大きさに戻れば自動的に復活する。

——違う、そうじゃない。

なんでお師匠が僕の部屋にいるんだ。僕の上で寝ているんだ。お
師匠は確かに夜遅くまでいろいろ作業をしていたし、だいぶお疲れ
のようだったけれども寝ぼけたことはなかった。

いや、何度かあった気がするけれど、部屋を間違えた上にこんな、
こんな……。

とりあえず僕は、静かに静かにお師匠の身体を横にずらした。

同時に、僕の身体を逆の方向にずらした。

お師匠はまさか僕の上で眠っているなんて思ってもいない、穏や
かな寝顔を浮かべ静かな寝息を立てている。この上ない熟睡モード
だ。静かにすれば、起きないはずだ。

そっとお師匠の下から脱出し、僕が寝ていた位置に寝かしなおす。

よし、これでミッションコンプリートだ。

さあ一階にいこう。朝ごはんを作るというセカンドミッションを。

「……弟子くん？」

背を向けて扉に手を伸ばした僕の背に、お師匠の声が突き刺さる。寝起きなのか、どこか舌足らずな感じの声だった。

ふりかえると――お師匠は寝ていた。寝言、のようだ。もう食べられない、というベタな寝言は聞こえなかったが、お師匠が完全に熟睡しているのはわかった。

僕は廊下へとすべるように脱出、一階のキッチンに直行。

吐き出せなかった息を、そこでようやく吐き出した。

お師匠は朝ごはんの準備が終わるころ、小さいいつもの姿でやってきた。

「なんかねー、弟子くんのトコで寝てたよー」

「気づいたら進入されてました」

「うー、ごめんねー。セラ、疲れてると寝相とか悪いらしいんだよねー」

たまに外に落ちてることがあるんだよね、と欠伸と共に語られる内容は、スープを作る手元が少し滑りそうになるものだった。……落ちてたって、それって飛んでたってことですよね。

「でもこれからはきつと、弟子くんに引き寄せられて弟子くんのトコにいくから、とっても安心だよねー。あのねあのね、弟子くんのトコで寝ると、すっごくいい夢を見るんだよー」

うふ、と意味深な、けれど意味を知りたくない笑みを浮かべるお師匠。

僕は決意した。

お師匠を極度の疲労にさらさないと。

10. 抜き打ちテスト

僕は基本的に、お師匠のアシスタントというか、雑用係だ。

お師匠が求める触媒の材料を倉庫から引っ張り出したり、毎日の食事を栄養面もそれなりに考えつつ作り、求められたら即座に甘味物も作りお茶の相手をする。

で、そのついでに魔女の弟子らしく、魔法のお勉強というのもこなす。

とはいえ、触媒を作るところまではできるのだけれど、いざ魔法にするとなるとまったく感覚がわからない。マンガよろしく唸ればいいのか、長々と呪文でも唱えればいいのか。

ちなみにお師匠はシンプルに一言。

「――【黒色魔法式】展開」

ぐらいだった。一般的にはそんな感じらしい。唱えなくても使えるらしいけれど、唱える方が意識がより集中するのだそうだ。掛け声のようなものなんだと思う。

あと魔法によっては長々と、呪文を唱えたりするそうだ。

もっとも、そこまでいくと魔法というより祈祷、もしくは儀式の範疇らしく、あんまり魔法は関係なくなるのだという。……どうやら、そういうのと魔法は別の何からしい。

さて、お師匠の手の中には黒い結晶が転がっている。大きさとしては、ちょっと飲み込むのは無理だなあって感じの大きさ。つやつやとした、ガラスのような光沢がある。

これはさっきお師匠が使った魔法で作られた結晶だ。

微弱な魔力で光り続ける効果がある。

「というわけで、弟子くんには『ランプの火』を作ってもらおうか」

お師匠はトレイに材料を載せ、僕の前に置いた。
ついでに使い込んだ秤も。

「レシピは教えたよね？」

「ええ、まあ」

「じゃあよろしくね！　これは試験なんだよー。もし大丈夫そうなら、イイトコにセラが連れて行ってあげるー。ダメなら連れて行くけど、イイトコにはならないからね」

「はあ……」

よくわからないけれど、抜き打ちテストのようなものらしい。だが、それでいいのかと言いたくなるほどかなり簡単だ。ちゃんと材料を計って、全部をきれいに混ぜればいいだけ。

モノによっては順番やタイミングも重要だそうけど、これは関係ない。

その代わりに分量が重要だ。

ランプの火とは、これぞまさに乾電池と呼んでいい代物。

触媒を別の物質――この場合は黒い結晶に再加工したもので、特定の器具の中もしくはそばに行くと自動で魔法式が展開され続けるという代物だ。どう見てもこの世界版乾電池。

ランプだと、通常なら電球やロウソクを置く場所に結晶の台座がある。ランプによっては光の強弱も調節できて、結晶は基本的に熱を持たないから必要ない時ははずすことができた。

……と言っても長持ちするものじゃないから、適度な需要がある。大きいものだといいい値になるので、お師匠も特大のを中心によく作っていた。まあ、ハイリターンが期待されるものは、だいたい材料もいい値なのでボロ儲けにはならないんだけど。

大きいものはそれ相応の材料が必要とされ、今、僕の目の前にあ

る手のひらに乗る程度の結晶を作るような材料じゃ、たぶん一瞬で燃え尽きてしまうような不良品にしかない。

科学が元の世界を発展させたように、この世界は魔法で発展してきた。

あの火種が作られてから、街中は夜でも明るくなったという。ロウソクは日常生活から何かの儀式的な用途へと持ち場を移したらしい。礼拝とか、そういう感じの。

あと結晶の寿命はパッと見ではわからないから、念のために常備もされているらしい。

……やっぱり電池だよなあ。

「じゃ、セラは向こうでお仕事するからねー。できたら持ってきてー」

お師匠はひらりと小さくなり、そしてふわふわと飛んでいった。仕事じゃなくて昼寝ですよねとは言えない小心者の僕は、おとなしく材料や秤とのにらめっこを開始する。基本的に赤魔法の応用なので、材料もそれによく使われるものが多い。

火薬とか、赤い石とか。

それを黒く染め上げるのは黒の魔素——魔法を、魔法とするためのもの。

一般的に【五色魔法式】と呼ばれている中で、まだ研究が進んでいないのが黒だ。というよりも安全な魔法式——レシピが作られた数が、圧倒的に少ないとも言う。

それだけ不明瞭なところが多い、という感じなのだそう。

で、その数少ないちゃんとした魔法式の代表が、ランプの火というわけ。

「さあてと……まずはこれから計るか」

鋤物が多いので、乳鉢でしっかりとゴリゴリしなければいけない。そうしなければムラができて、いい商品にならないからだ。基本的に、触媒として用いる材料はすべてキレイに混ぜ合わせなければいけない。それが別物への再加工ならなおのこと。

僕は袖をまくって、作業に取り掛かった。

11. 才能の褒め方

……さて、僕は正座してお師匠の話を聞いている。

僕の目の前には黒い残骸。あの結晶とは似ても似つかぬ謎の物体。ランプの火となる黒い結晶を作ろうとした僕が、最終的に作り出したのは……まあ、失敗作というやつだった。

手順は間違っていないはずだ。

というか、間違えるほど複雑でもない。

あらかじめ教えられたレシピの通りに材料を混ぜるだけだ。料理で言うとも玉焼きのようなもので、もしもかの料理を間違える方法があるならぜひとも聞いてみたい。

だけど僕は失敗した。

……どこで間違えたんだろう。

「というわけで、弟子くんのせーせきはっぴょーをします」

僕の前でお師匠は、ふわふわと浮いていた。

妖精種の羽は魔力の塊で、羽ばたかなくても浮いていられるのだと言う。というか羽ばたく力は皆無なんだと、本には書かれていた。……だから強風に抗えず飛ばされているのか。

「あのねー、セラの羽はどうでもいいからねー。ジロジロみないのー」

「はい」

「やっぱり弟子くんはさ、魔法式の展開がちよつと……うん、ダメダメな感じだね」

お師匠はくると一回転し、ヒトの姿になる。

そして僕が作った残骸の一つを摘んで、しげしげと眺めた。

「触媒の調合までは問題ないよ。一応結晶はできてる」
「だけど、とお師匠は続ける。」

「キレイに固定化されてないっていうか、そんな感じ。使えなくもないけど、たぶんね、一瞬だけペカッと光って消えちゃうと思う。失敗作じゃないけど、ダメダメな感じ？」

「どうしてだろうね、となぜか問いかけられた。」

「そんなの、僕が聞きたいくらいだ。」

正直なところ、中途半端に成功するなら最初から失敗してほしい。「これはパメラの世界構築理論と、セラの予想なんだけどね。世界の素材はあらかじめ用意されていてさ、それをやりくりしてたくさんの世界が、存在しているとするよ」

「はい」

「作られた世界には、その世界固有の『理』があるんだろうね。そこで生み出されたすべての物体は、その『理』という方式にのっとって作られるんだと思うんだよ、セラは」

それはつまり……僕がいる世界には魔法がない。魔法という『理』が存在しない世界で作られた存在だから、魔法式を扱うことができないという意味なのだろうか。

確かに、そうするのが一番わかりやすいと思う。

納得もできる。

「つまり僕は魔法使いにはなれない、ということですか」

「まあ……そうなるね。とはいえ同じ材料で作られた肉と魂なら、今後の訓練次第で眠っていた力がペカッと目を覚ますかもしれない。希望は捨てちゃダメダメなんだよ」

「……はい」

「それに使えないなら使えないで、開き直ればいいんだよ。セラみたいに触媒調合専門の魔法使いになっちゃえば。それに弟子くん

にはね、もっともっとすばらしい才能があるよ！」

「才能、ですか？」

「そーだよ、さいのーだよ。なんたって弟子くんはね、お料理が上手なの。おいしいよ。サラダのドレッシングも、スープも、お肉を煮込んだのもね、もちろんお菓子だっておいしいの」

にへら、と表情を緩ませた、幸せそうな笑みを浮かべるお師匠。どこかで見たような、と思い出すまでもない。毎食とおやつの際に見せる、恍惚としたそれ以外の何者でもないからだ。ここに来てだいぶ経ったけど、お師匠はいつも同じ反応をする。

ちらりと視線を向けた時計の針は、この世界で言う『おやつの間』を指していた。

「つまり『おやつくれ』ということですね」

「えっ、ちちち、違うよ！ セラは今ね、すぐく弟子くんを褒めたの！」

「はいはい」

「あああ、あとねあとね！ 弟子くんの場合『自分が使うのがアウト』だから、ランプみたいな仕組みなら魔法が使えると思うんだよ！ 具体的にはわからないけどね、可能性なら」

「スコーンですか？ パンケーキですか？」

「生クリームたっぷりのパンケーキ三枚重ね！ ——ってちがーう！」

違うのー、と大騒ぎするお師匠を放置して、僕はさっさとキッチンに向かう。

まあ、人間そう都合のいいことばかりではないので、天才的な魔法使いになれるかと思ったこともないし。むしろ似通った世界に飛んできた以上の幸せはないと思うんだよね。

確かに使えたら、それはそれでいろいろ便利なんだろうけど。

「弟子くん弟子くん、違うんだよ、違うのー」

「はいはい」

肩に乗ってぶつぶついうお師匠に、適当に返事を返しつつパンケ
ーキを焼く。

やっぱり、石をすりつぶすよりこういう作業の方が、好きかな。

……お師匠も喜んでくれるし。

12. 水上都市の歌姫

いつものように朝ごはんを作って、いつものように昼食とおやつの準備をして。お師匠は気ままに読書をしたり、時間のかかる実験の経過を伺ったり。そんな、他愛ない日常に。

「こんちゃーっす！」

聞きなれた少女の声と、周囲の木々を揺らす羽ばたきの音が追加された。

窓から空を見ると、細身の青黒いうろこを持つドラゴンが降下してくるのが見える。

友人が持っていたゲームに、ドラゴンに乗って戦っているキャラクターがいたけれど、彼らが乗っていたドラゴンと似ているように思う。飛ぶことに特化した、身軽な感じだ。

ゆっくりと降下したドラゴンの背には、毎度おなじみの彼女がいる。

「毎度おなじみ『魔女宅配』です」

「ごころーさまー」

一階にいたお師匠が、ヒトの姿になって近寄る。

ああ、ドラゴンの羽ばたきに吹っ飛ばされたからな、前に……。

僕も慌てて一階へ向かい、外に出た。いくらヒトの姿になっても、そのヒトが非力なことこの上ないお師匠だから、荷物の類は基本的に僕が持ち運ぶことになっている。

もちろん魔法を使えば簡単なんだけど、お師匠はそういうのは人を好んだ。世の中には身の回りのすべてを魔法でまかない、料理さえも魔法で仕上げるものぐさがいるそうだ。

で、そのものぐさな魔法使いとお師匠は仲が悪いのか、自力でできることを魔法でやるのを極端なほどに嫌う。なのでお師匠が作るのは、ランプなど生活必需品に使うものだけ。

「いつもご苦労様です、ミーネさん」

「いえいえー」

ひよい、とドラゴンから降りた魔女――ミーネ。

ゆるく結われた三つ編みが、身体の動きにあわせて揺れた。

「さてさて、いろいろ仕入れてきたんですけどどうっす？」

「……君は宅配業者なのか、商人なのかはつきりしたらどうかな」

「ふふ、ウチは副業オツケーですしねー。これで顧客もゲットできるですしー」

さあさあさあ、とミーネさんはいつものようにスティックを駆使し、魔法で繋がる特殊な空間からモノを目の前に出現させる。それは、僕が今まで見たことがない不思議なものだった。

水面のように、自然ときらめく宝石か何かの原石。

青のグラデーションが美しい布。

後は見たことがあるようなでないような、果物や野菜など。

イカや魚もあった。特殊な空間はイコール冷蔵庫というわけではないらしく、魚介類はカラカラの干物になっていた。これはこれでおいしそうで、思わず頭の中のレシピ帳をめくる。

「んー、これってさ、やっぱりあの水上都市から？」

「そうっす。ちょうど臨時で手伝いに行ってたんですよね。ちょうどお祭りの時期で、噂の歌姫さんを空からジーっと眺めさせていたかったです。いやあ、キレイだった」

「水上都市と……歌姫？」

「はいはいはい、説明はこのミーネさまにお任せを！」

言葉と共にポポンという感じの破裂音がし、見ればミーネさんが

謎の本を手に使っていた。

なぜか、メガネなんてオプションまで。

「水上都市っていうのは、文字通り水の上の都市。歌姫も以下同文です」

海の上にあるその都市には歌と、霧が満ちている。海路の重要拠点であると同時に、そこは現存する【古魔法】の一つを管理し、現代にも伝えている一族が収める国。

都市全体で守り伝えてきた【古魔法】は、声を触媒にする魔法。使い手は主に女性で、ゆえに魔女ではなく歌姫と呼ばれる彼女らは、国民にとっても慕われている。

——と、説明はされたものの、にわかには信じがたい。

「そんなこと、できるんですか？」

「一応はね。何たら魔法式ーっていうのも、その名残らしいし。ただね、声が届く範囲じゃないと魔法の効果はないし、魔石っていうレアなアイテムが必須になるから面倒なんだよー」

「だから廃れた、と」

「さすがセラさんのお弟子さん、飲み込み早いっす」

さてさて、とミーネさんはやりと笑った。

「ここにありますは、その神秘の都市の名産品！ さあさあ、早いもん勝ちっすよー」

「んー、どうするー？」

「……じゃあ、干物を各種、三つずつ。それからこの布を少し」

「まいどー！ ……ところで布は何に？」

「お師匠が盛大に破ったカーテンの補修に」

「あー、大変ですね、ガンバっすよ」

商品とお金を交換すると、ミーネさんは颯爽とドラゴンにまたがり、飛び去っていく。この辺は範囲は広いのだが、人手が足りないらしく、彼女はいつも忙しそうにしている。

家の上空で挨拶するように数回くるくると回り、彼女は次の場所へ飛び去っていった。

荷物を抱えて家に戻りつつ、僕はミーネさんと交わした言葉を思い出す。

海の上に浮かんだ、歌姫に守られた霧の都市。森の中に住んでいるから忘れそうになってしまふけれど、この世界にもそれなりに海が存在していて、そこに都市まで浮かんでいる。

その噂の水上都市に……少しだけ、行ってみたい気がした。

13. 嵐の前に

嵐が来るかもね、とお師匠はつぶやいた。

「……この辺、そんなに荒れるんですか？」

「時期によったらねー、結構雨とか風とか、すごいんだよう」

「へえ……」

雨とか風……まるで台風だ。

まあ、こうして家があり続けるということは、家にダメージがあるほどは荒れないんだろうと思うけれど。でも屋根の修理ぐらいは覚悟した方が、後でガツクリしないですむだろうか。

「そだねー、準備しないとね」

「食料とか買い溜めするんですか？」

「それもあるけど……うーん」

お師匠は窓の外を見ながら、煮え切らない様子だった。

「なんかねー、精霊がざわざわしてるんだよね」

「……精霊？」

「そ。この世界にいる、基本的に目には見えない存在、あるいは現象。彼らが踊った後に残されるのが魔石でね、魔素はその代用品として開発されたんだ。魔石は珍しいから」

窓際の定位置にかき集めたクッションの海に、お師匠はダイブする。

「そのせいなんだろうねけどねー、昔の魔法は精霊との結びつきが強かったんだよ」

その言葉に、僕は自然と作業用のテーブルにおいてある大瓶を見た。中には無色透明の小石がごろごろと入っている。全部、お師匠

の頼まれて森の中で拾ってきたものだ。

時々、あれを材料と一緒に碎いて混ぜ合わせることがある。最初
はてつきり何かの触媒になる、ただの石だと思っていたのだけど、
貴重なものなんだと聞かされた時はびっくりした。

確かに抱きかかえやすいサイズの大瓶に半分溜めるまで、結構時
間がかかったし。

魔素という便利なものが作られるのも、よくわかる。

「ここは精霊が多いからねえ……もしかすると『精霊女王』が生ま
れるのかもね」

「女王、なんですか」

「彼らに性別はないというけど、見目は女性らしいから女王なんだ
ってさー」

昔からの定説だよう、と寝返りを打ちつつお師匠は言う。

だけど精霊そのものを使役するとかいう類はない、とのことだ。

人によってはまさに神のごとく崇め奉っているらしく、冗談でもそ
んなことを言ったらぶん殴られるとのこと。

「でも、目に見えないのによくそこまで崇められる……というか、
信じられますね」

「基本的に、だからねー。魔法使いとしての才能が高いと、彼らを見
ることができる。特に女王になるような力を持つ精霊なんかは、
魔法使いじゃなくなっちゃって見れるよー」

セラも時々みかけるのー、とお師匠はにこにこしていた。

どうやら、精霊を見ると幸運が招かれる、という言い伝えがある
そうだ。お師匠の師がここにアトリエを構えたのも、この森が精霊
が多く漂うー来訪するスポットだからとのこと。

「だって魔石高いんだもーん、拾う方がお得だよー」

と、今にも眠そうな声で言いながら、お師匠はごろんごろんと転

がった。ああ、完全に睡魔にさらわれる直前といった感じだ。そんな無駄に抗ってないで、寝てしまえばいいのに……。

というか、服のすそがきわどいのでやめてください。目と精神に対する劇毒物です。

「うー、ねるー」

しばらくして、お師匠は仰向けになった。

やっぱり嵐かもね、とお師匠はつぶやいて、目を閉じる。

外は、惚れ惚れするほどの青空だった。まだ言ってる、と半分疑いつつも、僕は静かに庭に出て洗濯物を回収する。そしてそれから一時間もしないころに、外は真っ黒になって。

——豪雨と風が、世界を飲み込んでいった。

14. ハーヴェル

——ごめんなさい。

首にまかれた黒いひも。

わたしはわるいこだった。

おかあさまは、あんなにすごい歌姫だったのに。

わたしは、わるいことをする、わるい子になってしまった。おかあさんに、もうどこにもいないおかあさんにおこられる。ごめんなさい、ごめんなさい……ハーヴェルはわるい子です。

だけど、わたしの声はもうもどってこないのです。
にどと歌うことができないのです。

わたしは歌姫としてダメだから、黒いひもで声をころしてしまっ
たから。

だから、わたしはなみだをポロポロとおとすだけ。
ずっとくらしていた、神殿の前。ポイ、と、ゴミのようにつまみ
出されて。わたしはすわりこんで泣くことしかできません。だって
何もできなくなってしまったから。

まわりの人は、見ているだけ……でもない。
だれも、わたしを見ていません。

だってわたしは、この場所のために何もできない、ダメな子だか
ら。

やくたたず、だから。

きつと、このままおながすいて死んでしまうんだろう。首に黒
いひもをまいた歌姫は『ざいにん』だから、ハーヴェルはわるい子
だから、みんなにきらわれてしまっているから。

——わたしは、おかあさんを『ころして』生まれてきたと、神官さまに言われました。わたしには、ハーヴェルにはそれだけのいみがあったのに、と言われました。

だからがんばったんです。

つめたいお水につかるしゅぎょうも、がんばったんです。

すごいすごいと言われる、そんなおかあさんが大好きだったから。おかあさんのむすめとしてはずかしくない歌姫になって、おかあさんが天国でよろこんでくれるようにって、
だけど、だけど。

おかあさん。

ハーヴェルは何がいけなかったんでしょうか。

おかあさん。

ただみんなのために、歌っていただけなのに。

おかあさん。

「お前、歌姫なんだってね」

誰かが——わたしのそばにやってくる。

見上げると、そこにはとてもきれいな女の人がありました。

神殿を守っている兵士さんが、おどろいたようすで神殿の中にもどっていった。そして神官さまがもっとあわてたようすとびだしてきて。わたしを抱き上げる、その女の人をみて。

「不老の魔女が、何用だ」

「捨て子を拾っただけだが、何か問題でもあるのか？」

「その子は――」

「希代の歌姫リエル・シルスの娘ハーヴェル。知っているさあ、貴様に横から搔つ攫われたかわいいかわいい弟子候補の娘なんだから。……だ・か・ら、こうして迎えにきたのさ」

まじよ、とよばれた女の方は、長い長い耳をぴくぴくと動かしている。

本で読んだことがあった。

この女の方は、エルフ種なんだ……。

「ああ、ところで『次の娘』は育ってるのかい？　だからこの子を捨てるんだろう？」

「……何の、ことだ」

「それともあれかね。齢十四の美姫の身体を手に入れたら、もうそっちは役立たずになっちゃったのかね。マリエルはもう死んじまつたからねえ……かわいいかわいい、姫を残して」

「……っ」

「てめえの下種なタネでもさ、娘が生まれるならって上が見逃したんだよ。命の恩人をポイ捨てとはね。神官さまも落ちるトコまで落ちたもんさ。それでも娘に手は出さないんだねえ」

「きさま……この私を愚弄するのか！」

「近寄るんじゃないよ、この恩知らずのクソ野郎が。それ以上近寄ったら物理的に種無しにしてやるよ。さすがに呪いでダメにするのは、色々と『かわいいそう』だろうからねえ……」

わたしをだきかかえたまま、まじよさんはたのしそうにわらっている。黒い、きれいなドレスがひらひらと風にゆれて、長くて黒いかみのけが、まるでおどってるみたいにゆれている。

「なあ、ハーヴェル」

まじよさんはわたしを見て、にっこりとわらって。

「どうだい？　アタシのところにこないかい？」

わたしは、こくこく、とあたまをうごかしてへんじをした。

神官さまは……真っ青になったまま、わたしたちを見ているだけだった。

15. 同居人が増えました

一通りの家事を終えてリビングに戻ると、テーブルや床にどっさり和本があった。そういえば書庫の整理をする、とかお師匠が言っていたのを思い出す。

「手伝いましょうか？」

「んー、地下に運び込むからいいよー。下から上に持っていくのだけ手伝ってー」

「わかりました」

ということで僕は暇になってしまった。

ソファアに座って、とりあえず目の前にあった本を手取る。開くと、僕にも読める文字で書かれていた。さっと目を通した感じ、古い何かの文献か、研究をまとめた本のようなだった。

「……これは？」

「古い魔法の資料だよー。前にも言ったけど、【古魔法】は基本的に声も触媒として使っていたんだけどねー、逆に言うとな声がないと魔法が魔法になってくれない感じだったの」

本を抱えてリビングにやってきたお師匠が、床に本を置きながら説明してくれる。

その時代の魔法は、聞けば聞くほど僕が知るよくある魔法だ。

「声なしに魔法が使えないから、今より魔法犯罪者への罰も手っ取り早かったんだよ。声を殺してしまえば、それで終わっちゃうもの。それが【呪術式】の、呪いの始まりなんだよ」

「覚えておきます」

「いいよいいよー、【呪術式】はともかく、今はもう声を使う魔法なんて、そうお目にかからないものー。水上都市の歌姫だって、お人形みたいに大事にされるから罪人にもならないし」

「まあ……言い方は悪いけど、貴重品ですからね」

「そーゆーことなのだよ、弟子くん」

お師匠はまた二階に戻っていく。読まない本と、読むようになった本を、こうして定期的に入れ替えているのだけど、僕は地下に入れない的な意味でさほど役に立てないのが悩みだ。

まあ、ここに運び込まれたものを上に持っていくことはできる。それまで少し読書でもしようかと、僕は適当な本を探して。

「――」

換気のためか開けっ放しになっている戸口に、彼女がいることに気づいた。

小柄な……たぶん、まだ十歳にもなっていない子供だ。

ゆるく癖のついた、わずかに青が見える黒い髪。……いや、これは黒というより黒に近い灰色と言うべきかも知れない。髪は毛先が地面につきそうになるほど長かった。

彼女は不安に揺れる灰色の瞳で、僕をじっと見ている。

「えっと、君は近所の子？」

「――」

ふるふる、と首を横に振った彼女は、ずっと握っていたらしい手紙を差し出した。

そこにはたった一言『セラヘ』とだけ、きれいな文字で綴られている。

封筒の裏には貝殻を模した美しい判が押されていた。

そこに添えるようにして、パメラ・シェルシュタインという名前が書かれている。僕の記憶が正しければ、お師匠が『世界について研究している変わり者』と言った魔女の名前だ。

「お師匠、ちょっと」

「んー？」

お師匠を呼んで、手紙を渡した。

僕はお師匠の背後に回って、その手紙を見る。

そこには、こう書かれていた。

『この子はハーヴェル・シルス。元水上都市の歌姫さ。事情があった引き取ったんだけど、連中には恥ってもんがないらしくてね……ちよっと徹底的にやりあうから。ククク、アタシとシェルシュタインをなめんじやないよ、あのペド野郎が。徹底的につぶしてやるつもりだよ』

「……ねえねえ弟子くん、『ペド野郎』ってどういう意味？」

「要するにヘンタイってことです」

詳しい説明をしても何なので、簡潔に説明する。

ヘンタイかー、それは確かに問題だね、とお師匠は不愉快そうに唸った。

この世界でもそういう類は、あまり好まれないようだ。

『つてことで、連中がハーヴェルを諦めるまで預かっておくれ。お札は弾むからさ』

「……なにこれ」

手紙を手になわなと震えるお師匠。

僕は思わず手紙を持ってきた少女――ハーヴェルを見た。

びくっと身体を振るわせた彼女は、そのままうつむいてしまう。

大丈夫、と笑って頭をなでてやると、少しだけこわばった表情が緩んでくれた。まだ、打ち解けてはくれないけど。

「パ……」

問題はお師匠の方だった。このハーヴェルという名前の子供がひどい目にあって、そこから救い出したけれど問題が終わっていないのは、さすがにお師匠にもわかつていると思う。

しかし……まあ、いきなり巻き込まれたらそうも言っていられないわけ。

手紙を握り締めている手が、ぷるぷると震えている。そして。

「パメラのばかああああ！」

朝からお師匠の絶叫が響いた。

こうして、この家に新しい住民が追加されたのである。

16. はじめてのお料理

トントントン、と野菜を切る。

とん、とん、と野菜が切られていく。

横目で様子を伺いながら、僕は夕食の準備をしていた。隣には、危なっかしい手つきで野菜を切っているハーヴェルがいる。……実際に緊張した、こわばった表情だった。

「料理は初めて？」

「――」

こくり、と頷かれる。

質問してから、そういえば彼女は『歌姫』だと思い出した。なにせ町を一つ浮かし続けるために必要な存在なのだから、料理なんてするはずがない。というか必要が皆無だろう。

ケガでもされたら困るだろうし、何より召使がたくさんいただろうし。

そのわりに来ていた服は、シンプルで質素なものだった。もしかすると着替えさせたのかもしれない。あるいは、あの格好でどこから追い出されたのだろうか。

ハーヴェルとの出会いから数日。

ミーネさんを通じて僕らが知ったのは、彼女が受けたひどい仕打ちだった。

類まれな力を持つ歌姫を母に持ち、しかしそれに似合う力がなかったハーヴェル。

たったそれだけの理由で、彼女は居場所をなくした。

――その『声』すらも殺されて。

拳句、向こうの都合次第では連れ戻される可能性があるという。実に腹立たしいことだ。今ほど自分に戦う力がないことを、恨んだ時はない。戦えたら、どれだけ安心できるか。

誰が来ても追い返すと、怯える彼女に約束できない自分が情けない。

本当に、情けない話だった。

「――」

「ん？」

くんくん、と服を引っ張られる。

ハーヴェルはどこか自慢げな表情で、彼女用のまな板を指差した。全部切れた、ということらしい。きれいにさいの目きりされた野菜が、まな板の真ん中にちょこんと山になっていた。

多少は大きさにばらつきはあるけれど、十分に許容範囲。

少なくともお師匠よりは、ずっとずーっとマシだ。

あの人、魔女としては天才なんだろうけれども、いかんせん、こういうことがまったくできない。させるだけムダとは、まさにお師匠のための言葉なんだと僕は常々思う。

元々僕だって、料理とかはそうできる方じゃない。

ゆで卵とかぐらいなら作れる、という感じだ。繕い物なんてしたこともない。むしろ掃除以外の何もかもを、こっちに來てから本格的に触れてみたと言ってもいい。

それもこれもお師匠が何もできないせいだ。

そして――僕がそれ以外に何もできないせいでもある。

「よくできました。じゃあ、向こうで休んでいいよ。あとは僕がやるから」

「――」

しかしハーヴェルは動かない。

鍋に野菜を入れる僕を、じっと見ているようだ。……調理を見学

したい、ということなんだろうか、これは。キッチン結構広いから、邪魔にはならないけれど、少し緊張する。

とりあえず、僕は鍋に油を入れて野菜を炒めはじめる。

今日は野菜たっぷり具沢山スープだ。焦がさないように具をかき混ぜる僕の手を、ハーヴェルはじっと見ている。彼女はどこからか椅子を持ってきて、その上に立っていた。

視界の端に、ふんだんにあしらわれたフリルが入る。

ハーヴェルが着ている服の装飾だ。

たまにテレビで紹介されていた、ロリータなるジャンルの服に近い感じがした。まさにお人形と言った感じの、かわいらしい洋服だ。……ちなみに、お師匠の余所行き用衣装の一つ。

普段は装飾のカケラもないワンピースだけど、それなりの場所に行くときには、やはりそれなりの格好をするらしい。僕は一度も見たことがないけど。シンプルなのが好みだそうだ。

でもお師匠にも絶対に似合うから、普段から着ればいいのに。そう言ったら、それじゃ余所行きの意味がないんだよう、とお師匠に怒られてしまった。

……乙女心はよくわからない。

17. 添い寝リターンズ

「……眠った？」

「ええ、まあ」

夜遅くに、僕とお師匠はリビングにいた。

ハーヴェルはいない。お師匠の部屋にあるベッドで眠っている。

僕は紅茶を二人ぶん淹れて、テーブルに並べた。

「あー、今日も疲れたー」

ヒトの姿をしているお師匠は、ソファアの上で胡坐をかいている。

……いろいろ危ういのでやめてほしいんですけどね、ええ。

お師匠の服は、どれもこれも丈が短いから。

「もう魔力すっからかーんだよー」

しばらく羽は出ないね、ため息混じりにつぶやいた。

そう、お師匠は自ら望んでヒトの姿というわけじゃない。

妖精種の羽は魔力の固まりだ。あれは使い切らなかった魔力を、羽の形に固定しているのだと言う。要するに、あれはストックというわけだ。普通なら使い切らない。

しかし魔法によっては、とんでもない負担を支払うことがある。

そうすると妖精種はあの小さな姿を保てず、ヒトになってしまうのだ。

「……でもなんでヒトの姿に？」

「さあねー、セラもわかんない。そういうものだーって認識だもの」

「不思議ですね」

「空を飛ぶだけで魔力を消費するから、魔力が無くなると飛べなくなっ、でもあの大きさだと危ないからヒトの姿になるっていう説

があるけど……まあ、そんなもんじゃないかなー」

「当事者がそんなアバウトでいいんですか」

「だって『そうなる』んだから仕方ないよう。調べる技術なんてないしー」

「ずずず、と行儀悪く紅茶をすするお師匠。」

よくわからないけれど、お師匠が言った説は結構わかりやすい。

確かにあの大きさを足元をりよこりよこされたら……踏まない自信は僕に無い。お師匠が相手でも、自信が持てない。

自己防衛というヤツなんだろうか。

何にせよ、とても便利だ。

時と場合とお師匠の服装にも寄るけれども。

たとえば今なんかは、あまりよろしくないタイミングだ。お師匠が使うベッドは一人用で大きいと言いがたく、子供とはいえ二人も眠れるほど面積はない。

僕のベッドはふた周りほど大きいからいけそうだけど、もしベッドを入れ替わるとしても明日からの話だ。さすがに眠ったハーヴェルを、起こすようなことはできない。

普段ならベッドは本を置く場所で、お師匠は部屋にある綿やら何やらを詰めた籠の中を寝床として使っている。しかしヒトの姿ではさすがに使えない。

かなり困った状態なのだけれど、お師匠はなぜかうれしそうに笑っている。

数秒後、その意味を僕は思い知った。

「こうなったら仕方ないね。セラが弟子くんに添い寝をしてあげよう」

「結構です」

「遠慮しなくてもいいんだよう。さあ寝よう、ほら寝よう」

「僕は床でいいです」

「師匠命令には従いたまえ、さあ、添い寝だよ」

「だから、僕は床で……」

「じゃあ、セラも床で寝るよ。弟子くんが寝るところで、セラも一緒に寝るの」

さらに数秒後、僕は自ら折れることにした。このまま続けてもたぶん堂々巡りだし、どうせ朝起きたら隣にいるんだろう。結果が同じなら、もう最初からおとなしくする方がマシだ。

がんばれ、僕の理性。

18. 言葉

朝起きて三人分の食事を用意し、家事をこなしつつハーヴェルの様子を伺い、お師匠の手伝いなどをし。昼食を作り、日替わりおやつも作り、夕食の準備をし、汗を流して眠る。

それを何度か繰り返していくうちに、僕はある問題に直面した。

――ハーヴェルだ。

彼女の首には、黒く禍々しいあざがある。一見するとそれはレースのようで、美しくすら見えるけれど、その黒いあざのせいでハーヴェルは声を出すことができないでいる。

声を出せない、というのは不便だ。

他のことをしながら問いかけ、それに対する質問を得る……とか、僕が日常で普通に使っていることができない。これで迷子にもなられたら、それこそ大騒ぎになってしまう。

何かしら、意思疎通する方法はないだろうか。

僕は何通りか手段を考え、ある日、夜中にお師匠に相談してみた。

「やっぱり筆談ですかね」

「んー、無難だよねー。問題は文字を教えなきゃいけないことだけどー」

「……そういうの教えないんですね、その神殿とやらの人たちは」
「必要がないからじゃないかなー」

お師匠がいうには、歌姫というものは崇められる存在なのだそう
だ。

時々人前に出て崇められて、普段は歌をうたったり世話をされた
りするだけの日々。必要のないことは何一つとしてさせずにいて、
もしも『使えない』となったら捨てる。

だから歌姫は、ハーヴェルは基本的な知識がない。年齢もあるんだろうけれど、文字の読み書きもできないし簡単な計算もできない。たぶん、僕以上にこの世界を知らないと思う。

……いや、知らないように育ててきたんだ。

下手に知識をつけられたら、自分たちの言うことを聞かなくなると思う。これはまさに道具扱いだ。道具として使い勝手がいいように育て、そして捨てた連中への怒りがこみ上げる。

まあ、そいつらを詰つても問題は解決しない。

殴りこむにしても水上都市は遠いし、前提条件である殴りこむだけの力もない。兵士か何かにバツサリ切られておしまいだ。それに長く続いた行為を、止めるだけの材料もないし。

歌姫がいなければ都市は終わってしまう。

都市に暮らす人は、きつとかなりの数いるのだろうから……彼らと歌姫を秤にかけて、そして選んだのが今のシステムなんだと思ういや、そう思わないとやってられない。

もしもくだらない何かのために、ハーヴェルがこんな目にあったなら。

僕は……。

「とりあえず文字のお勉強だねー。セラ、メルフェニカの魔法学校で時々特別せんせーもするから、一応『人に何かを教える』のはそこそこ得意な方だと思うんだよう」

と、そこでなぜかお師匠は、にやりと僕を見て笑い。

「弟子くんも、文字は読めるけどあんまり書けないから、一緒におべんきょーだね。例の日記だってニホンゴってので書いてるでしょ？ セラには読めないからわかるんだよー？」

「おつと僕には用事があるので失礼しますよお師匠」

僕はすばやくその場を離れた。

19. お買い物

……さて。

僕は今、お師匠とハーヴェルと一緒に、近くの町に来ている。

この世界に来た時に、僕が散々さまよった場所だ。

魔法大国であるメルフェニカ王国の隣、同じく魔法を重視するノイン王国。ここに来て長い時間が経ったように思うけれど、僕は初めて自分が住んでいる国の名前を知った。

白いレンガっぽい資材で作られた建物は、実にオシャレな雰囲気がある。ヨーロッパのような感じと言うべきだろうか。道は整備されていて、ところどころに噴水と公園がある。

そこには子供がたくさんいて。

「にゃー！ やめれー！」

なぜか、お師匠が追い回されていた。

一応、買い物に来ただけだけど……あの様子では無理かもしれない。ちなみにハーヴェルは子供たちに混ざって、一緒にお師匠を追いつけている。どこことなく楽しげな様子だ。

僕は近くのベンチに腰掛け、はしゃぐ子供の声を聞きつつ周囲を眺めている。ここはちょうど町の中心部で、僕の位置から見て左右に伸びているのが大通り――街道の一部だという。

右がノイン王国の首都へ、そして左がメルフェニカ王国だったはずだ。

この道をメルフェニカ方向へ進むと、ランドール領があるという。お師匠曰く、魔法使いは行かないほうがいい場所だとか。何でも極度の魔法嫌いで、バレたら命はないのだとか。

特にお師匠——妖精種やエルフ種など魔法が使えて当たり前前の種族だと、実際には使えなかったとしても問答無用で追い出されたり、白い目で見られたり、ボラれたり……などなど。

聞くだけで恐ろしい町だ。

そんなところに到着しないでよかったと思う。

いや……異世界から来たなんて言ったら、たぶん魔法使いかそれに似た何かに認定されてしまうだろうし、そうなる何と何もわからない僕としてはまさに人生の終わりなわけで。

「――」

くんくん、と服を引っ張られる。

いつの間にか僕の背後に、ハーヴェルが立っていた。

彼女を見て僕は、ここに来た理由を思い出す。ハーヴェルの服やら何やら、ともかくいろいろと買い込むために来たんだった。……問題はお師匠が、未だ追い回され続けていることで。

「あー、先に服の店に行ってますからねー」

と、僕は軽く声をかけるだけにし、ハーヴェルと手を繋いで店に向かった。

背後から薄情者だの何だの聞こえるけれど、聞こえないことにする。

初めて『町』に来たのか、ハーヴェルはどこか楽しそうだった。

表情はあまり変わらないのだけれど、だんだん彼女の感情を掴み取ることができるようになってきている。

そんなハーヴェルが、ある店の前で足を止めた。

「――」

ちらり、と商品と僕を交互に見る。

ガラスの向こう側にあるのは、人形が纏ういかにも女の子らしい服だった。

今の服ほど装飾がゴテゴテしていない、シンプルな感じのワンピース

ース。足元にはリボンがついた靴に、髪飾りもある。値札を見たところ、結構なお値段のようだけれど……。

「――」

じいっと、見られている。

一応、僕がサイフを預かっているし、そこその金額は持つてきたのだけど。さすがにちょっと高すぎるというか、森の中で着る服じゃない、かな。普通にしているても結構汚れるし。

とりあえず店の中に入る。

ハーヴェルは店の中に入ると、手ごろな値段の服を見始めた。

どうも、この店にある服が気に入ったという感じがしい。ほっと胸をなでおろしつつ、ちょこまかと移動する彼女について歩く。ピンクピンクした店内は、ちょっとだけ居心地が悪い。

「――！」

ある服とリボンをを手にとって、ハーヴェルは僕を振り返る。

これまたいかにも女の子、という感じのワンピースだ。

Tシャツっぽい生地できている。すそには濃いチェックの布が、ひだを作るように縫い付けられている。リボンはその布と同じもので作られていて、黒いレースで縁取られていた。

「こういうのがほしいの？」

こくこく、とうなづかれる。値札に書かれた値段は手ごろだ。これならあと三着ぐらいは買っても大丈夫だろう。そういうと、ハーヴェルはうれしそうに僕に抱きついてきた。

だんだんと感情を表に出してくれて、僕はうれしく思った。

その後、僕とハーヴェルは他の店を巡り、それぞれで服や靴、髪

飾りなどを購入。ついでに筆記用具の類も入手して、さらについてカフェでちょっとした甘いものなども食べてみた。

夕暮れが始まりかけたころに、お師匠と別れた場所に戻ったのだけれど。

「……ぐすっ、ひどいよう」

木の上でひざを抱えてすねたお師匠の説得に時間がかかって、結局、そのまま一泊する羽目になってしまった。今度からは、しっかりとお師匠を確保してから移動しようと思う。

20. 謎の苗

庭の果樹に実がなった。

どうも元の世界とはいろいろ違うようで、果樹は基本的に数日おきに一つか二つは実をつけてくれる。何ていうか……ゲームみたいだなあ、とか思ったりする程度に規則的だ。

とはいえこれはこれで便利なもので、なぜならほぼ毎日何かしらの果物を収穫することができている。それらを利用する料理などを、効率よく献立に加えられるのだ。

朝から僕はハーヴェルに籠を持ってもらいつつ、レモンっぽい果物を収穫する。

っぽい、が要らないくらいレモンレモンなんだけど、微妙に違った。そういう凄く小さな違いに気づくたび、それを認識するたびに、ここは僕が生まれ育った世界ではないと思う。

「――」

僕が果物をもぐたび、ずっと籠を持ち上げるハーヴェル。

その目は、それで何を作るの、と問いかけるようにキラキラしていた。

柑橘類はいろいろと使える。ジャムにしたり、紅茶とかに入れたり、料理の下味などに使ってみたり。これはさすがに無理だけど、そのまま食べるなんて選択肢もあるだろう。

今日は……そうだな、ドレッシングに使おう。

果汁を絞って、皮もきれいに洗って細く切って混ぜて。

「畑から野菜を取ってこなきゃなあ……」

お師匠は基本自給自足が好きらしく、僕が作ったあの家庭菜園をよくいじっていた。どこからか持ってきた謎の苗を植えたり、水を

やったり、肥料らしきものをまいていたり。

僕がひそかに福袋苗と呼んでいるあれは、森の中で見つけてくるそう。これは何ができるかなあと子供のようににはしゃがれたら、僕には笑顔で苗を丁寧植える以外の選択肢はない。

だってはしゃぐお師匠は、とてもとても可愛いから。

ちなみに、謎の苗はだいたい野菜かハーブラしきものができる。トマトのようなものやジャガイモのようなもの。丸いトウモロコシみたいなのがあったのもあった。

いくつかはさらに種を取り、畑に植えていたりする。

……季節やら土地やら気温やら何やらといった細かい要素は、あまり関係ない世界なんだろうか。要するにどこでも何でも育つ的な。便利だけど、僕としては違和感が少しだけ。

とはいえ細かいところを気にしても仕方がないし、都合もいいし、ありがたくこの世界の不思議な仕組みを受け入れることにしている。少なくとも、害になるものではないのだし。

「ありがとうハーヴェル」

「――」

ハーヴェルに持ってもらっていた籠を受け取り、頭をなでる。

うれしそうに少し微笑んで、彼女は家の中に走って戻っていった。それと入れ替わるように。

「弟子くん」

お師匠がギューンと飛んでくる。

僕にぶつかるといいうブレーキをかけ、お師匠は僕のそばに急接近した。

「じゃーん、みてみてー」

得意げに差し出されたのは、福袋苗。

ああ、また持ってきたんですね、と答えつつ、僕はどこに植えるか考えていた。

21. 木陰の揺り籠で

穏やかな気候は、どうしても睡魔を呼び寄せる。

一番危ないのは昼食後だ。お腹がいっぱいになって気温も程よくて、どんなにしっかり睡眠をとっていても、ついつい眠くなってしまう。横になったら、もう戻ってこれない。

特に危ないのはお師匠だ。

「……むにゅ」

現在、実に幸せそうな寝顔を僕にさらしつつ、木陰で惰眠をむさぼっている。食べてすぐに寝るのは身体によくないと、あれほど脅したにもかかわらず効果は限りなくゼロだった。

お師匠はお世辞にも寝相がいいとはいいがたく、普通に目の毒な人ですけど。

こう……振り上げた足とか、いろいろと。

今度、お師匠にロングスカートなどを買い与えなければ。マキシ丈のスカートをはいている女の子を町で見かけた。あれなら多少足を振り上げても大丈夫なはず、きつとたぶん。

問題はそういうのをお師匠が気に入るかどうか、だ。ことごとく所持している服のスカート丈は短いから、もしかすると長いスカートは嫌いなかもしれない。動きにくいだろうし。

問題は、手に入れたとしてどうやって着せるか、というところ。普通に進めても着てくれるとは思えない。

たぶん僕が褒めたら、気を良くしてきてくれるようになるんだろうけど。まずは着用するという最初の一步を、何とかして踏み出してもらわないと。そこが一番の壁であり問題だ。

しかしこの前に買い物に行ったから、当分出かけないと思う。
足りない調味料も、足りている調味料も、一通り買い込んだのが
痛い。

一番少ないのはコシヨウなんだけど、これまでの経験上からして
普通に使い切ろうと思ったら一ヶ月以上はかかる。もちろんコシヨ
ウ三昧のメニューにすれば、もっと早くなるけど。

「さすがにそこまでは……」

そんなわけで、僕は現状に耐える以外のすべを失った。

お師匠は、一度男子高校生世代の脳内を覗いて自重を知るべきだ
と思う。中学生まで範囲を下げてでもいいかもしれない。それとも、
この世界の同年代はみんな達観しているのだろうか。

……いや、それはないだろう。

お師匠が無頓着で、自覚が皆無なだけだ。

あとは、きっと僕がそもそも異性というカテゴリにいないんだと
思う。悲しい話だけど僕はお師匠にとって弟子以外の何者でもなく、
種族だとか年齢だとか性別だとか些細なことだ。

それはそれで切ないような、くっつかれたりでうれしいような。
ちよつとだけ複雑だ。

さて、あのまま寝かしていたら風邪を引く。

僕は物置から薄い毛布のような布を引っ張り出して、お師匠のと
ころに戻った。

「――」

なぜか、ハーヴェルがそこにいた。

お師匠の隣で、ネコのように少し身を丸くして。

ほんの一分かそこらの間に出現した彼女にも毛布をかけて、僕は
家へ戻る。時計の時刻はちょうどお昼とおやつの間。今からなら、

少し凝ったものが作れると思う。

棚から砂糖や小麦粉を引っ張り出しながら、僕はぼんやり考えた。お師匠がいて、僕がいて、そしてハーヴェルもいる。実に穏やかで平和な日常だ。意味もなく笑ってしないそうになるくらいに、僕が置かれた環境は幸せなものだ。

いつまでも続けばいい。

この日々が、いつまでも続けばいい。

そんな都合のいい展開なんて、ありえないとわかっているけど。

22. 麗しき魔女の来訪

その日はいつも通りだった。

夜更かしをしたのか、寝起きが良くないハーヴェルに甘いココアを出し。

セラも甘いのがいいよー、と喚きだした、さっきまでブラックのコーヒーを所望していたお師匠に、普通にコーヒーを出し。自分用にあっさりとした紅茶を入れて、パンをかじって。

そんなびっくりするほど穏やかな朝に。

「失礼するよ」

その人はやってきた。

黒いドレスは、胸元があらわになってなまめかしく、左右にはかなりきわどいところにまで達しているスリット。どこの貴婦人だ、女王だ、と言わんばかりのいでたちの美女。

その耳はエルフよりしく長く、少し垂れた感じだった。

お師匠はあいた口をパクパクさせ、彼女を指差し。

「パメラ……！」

何度か聞いた名前を口にした。

——パメラ・シエルシュタイン。

世界的にかなり有名な魔法使いの一門に所属する、知らぬものがない魔女。エルフ種という長命な種族の生まれで、ぱっと見は二十台前半だけどすでに数百年は生きているという。

お師匠の古い友人であり、ハーヴェルをここに預けた張本人だ。

黒髪を揺らし、パメラさんはリビングのソファアに腰掛ける。そこ、お師匠のお気に入り入りの場所と言うか定位置なんですけどね。ほ

ら、お師匠がワナワナと震えだしてるし……。

どうやってお師匠をなだめようか考える僕をよそに、事態は勝手に進行する。

ハーヴェルは朝食もそのままに、パメラさんに向かって走っていった。

そして、抱きつく。

「――」

「よしよし、元気だったかい？」

「――」

「そうかい……それはよかった」

どことなくキツイ印象を受けるその美麗な顔に、優しい笑みか浮かんだ。

それを見ていたお師匠は、すっかり怒りなど引っ込んでしまったのか。

「それでさー、ハーヴェルに関する揉め事は収まったの？」

元の大きさに戻って、ふわふわと友人の所に飛んでいく。僕はとりあえず紅茶を用意することにした。そもそもハーヴェルに関しては、お師匠が頼まれたことで僕は関係ない。

……気にならないわけではない。

だから準備をしながらも、しっかりと聞き耳は立てている。

おそらく、という言葉をつける必要はないんだろうけど、今回の一件について何か動きがあったんだと思う。でなければ、渦中の人である彼女がここに来る理由などないわけだし。

問題はそれが吉報なのか、その逆なのか。あの様子からして悪い知らせではない……と思うけど、ハーヴェルの前だから、それを見せないようにしているのかもしれない。

ハーヴェルはもう充分なほど傷ついた。

これ以上は、要らない。

「一応、話はついたよ」

僕が用意したお茶を飲み、パメラさんが口を開く。

「ハーヴェルはもう自由さ……この子は、歌姫でも何でもない」

その言葉に僕とお師匠は顔を見合わせ笑みを浮かべる。

だけど次の言葉に、それは凍りついた。

「ただ、ハーヴェルには死んでもらうことになった」

淡々とした、わずかに笑みすらこもったその一言で。

「この子の母親が有名な歌姫でね、その娘も以下略ってわけさ。……つまり、ハーヴェル・シルスという歌姫の娘に『歌姫になる』以外の未来なんて、誰も用意してなかったわけだね」

歌姫以外のハーヴェル・シルスの存在は許さない、だそうだとパメラさんははき捨てるようなため息をこぼす。発言者に対し、心底あきれ果てているのがわかった。

だけど、だからって死んでもらうって……。

「ハーヴェル、大丈夫？」

「――」

パメラさんの隣にいるハーヴェルから、表情が失せていた。

ぎゅっとひざの上で握った手は、力を入れすぎて白くなっている。その手を、ずっと小さな手で何度かなでながら、お師匠は心配そうにしていた。そして傍らのパメラさんを見上げて。

「どうするの？」

「実際に死なせるわけじゃない。歌姫には死の儀式があってね、まあ、要するに一般で言うお葬式ってヤツなんだけども。それをするために必要なを提供すれば命は問わない、とさ」

「その……必要なもの、とは？」

僕は思わず問いかけていた。

パメラさんは苦笑を浮かべて答える。

「ハーヴェルの『名前』と、その髪さ」

23. ハル

パメラさんの来訪から少しして、『死の儀式』の準備は始まった。何でも特定の日の夜に、と決まっているらしい。

「名前は後々考えるとして、まずは髪だね」

どこからか取り出されたのは、美しい装飾を施したハサミだった。聞けば、歌姫の死の儀式にのみ使うものらしい。本当は向こうの関係者が直々に尋ねる予定だったそうだけど、パメラさんが半ば奪うようにしてわざわざ預かってきたそうだ。

それは、ここが知られてハーヴェルが連れ戻される、などの裏切りを警戒してのことなんだと僕は思うのだけど、逆に疑われたりはしなかったのだろうか。

「ああ、それは心配ないよ。歌姫の血統は独特でね。偽者なんて通用しないさ」

しよぎ、とパメラさんの手に握られたハサミが、ハーヴェルの髪を切り落とす。

ハーヴェルはずっとうつむいたままだった。お師匠は傍らに立って、落ちた髪を丁寧に拾って集めている。僕はというと、ランプを手にパメラさんの手元を照らす係だ。

本来なら厳かな神事で、お香を焚いた専用の部屋で行うらしい。遺体は神殿とやらの置くに安置し、切られた髪を人々に見せ歌姫の死を知らせ、その髪を通常の遺体として埋葬するという。だから歌姫は、その候補のころから髪を長く伸ばすそうだ。

……髪の毛ぐらいは、なんて言うことはできない。

歌姫の象徴で、ハーヴェルだってそのために伸ばしてきたんだと

思う。それを、命を救うためとはいえ、自由になるためとはいえ、
こうして切り捨てなければいけないなんて。

いずれ生きていけば伸びる、なんてくだらない説得は無意味。

ただのほんとは生きてきただけの僕には、きつとわからないと思う。

小さなハーヴェルが背負ってきたものの重さ。

それらを失う苦しさ悲しさなんて。

「……さて、これで髪は終わったね」

肩につく程度の長さに切りそろえられた、ハーヴェルの髪。

これはこれでかわいらしい感じた。

「次は名前だけど……自分で考えたかい？」

「――」

こくん、とハーヴェルは返事をする。

懐から出した紙には、少し歪んでいるけれどしっかりとした字で。

「ハル――いい名前じゃないか」

パメラさんは少し誇らしげに笑ってから、ハーヴェルの喉にそつと触れた。少し伸ばしてつややかに整えられたつめの先が、ゆつくりと少女の首の黒いあざを撫でる。

その瞬間だった。

ハーヴェルの声を殺したそのあざが、うつすらと青く光り、まるで水に溶けていくようにじわりじわりと薄れていく。あれほどはつきり、そしてくつきりと刻まれていたものが。

「あ……」

それがすべて消えたころ、小さな声が漏れた。

それはかわいらしい声だった。

澄んだ鉄琴のような、けれどやわらかいきれいな声だった。

それがハーヴェルの――ハルの声だと最初は理解が追いつかなくて、誰もが無言で彼女の喉元を見つめる。あの、黒い刻印が消え去った、本来の白さをさらすその肌を。

「これはアタシからの贈り物さ。戻すなどとは言われてないからねえ」

ククク、と肩を揺らしてパメラさんは笑って。

「ああ、ちゃんとお礼は別に用意するから安心おし」

「いや……要らないよ。セラは何もしてないもの」

これだけでいいよ、とお師匠は満足そうに笑っている。そしてハルにくっついて、グリグリと頬擦りした。ハルはくすぐったそうにして、少しだけ目じりに涙を浮かべて笑っている。

そこに二つの、小さな笑い声があることに僕の視界は少し歪んだ。「弟子にするのを諦めさせられたんだからねえ……これくらいはしない。アタシとしてはまだまだ連中を許さないっていうか、次こそは徹底的に叩き潰してやるつもりさ、ククク」

「パメラ……まさかこれが『はじめて』じゃない、とか？」

「魔女としての才能がある場合、歌姫としても優れるからねえ」と、不気味かつ意味深に笑うパメラさん。

僕は思った。

この人にだけはケンカを売ってはいけないのだと。

24. おくりもの

朝になった。

これからハルは、ハル・シエルシュタインという名前で、メルフェニカの魔法学校に通うことになっている。元は歌姫でもあったわけ、魔法使いとしての才能は母親譲りなんだとか。

だから、それを生かす道が最適という判断からだ。

学校は学期の途中らしいけれど、ハルは才能があるから大丈夫、とのこと。

「学校はねー、きっと楽しいと思うよー」

お師匠は、さっきから念入りにハルの髪をいじっていた。

少しでも長く一緒にいたいのかもしれない。

だけど、長いころならともかくすっかり短くなってしまった髪は、そう長々と弄繰り回せるものでもなくて。しばらくするとお師匠は、名残惜しそうに作業を終わらせた。

「メルフェニカの魔法学校はいいトコだとセラが保障するよ。だって、セラが時々せんせーしてるトコだからね。何かあったらセラの名前を出すといいと思うよ」

「うん……ありがと、セラお姉ちゃん」

ぎゅうぎゅうと、子供のような大きさのお師匠と、子供のハルが抱きしめあう。僕はまとめられたハルの荷物を持って、それを見ている。ここは混ざるべきだろうけど、恥ずかしい。

「お兄ちゃんも、ありがと」

それからハルは僕に駆け寄ってきて、ぎゅうっと抱きついた。

まだ彼女の声を聞いてから数時間しか経っていないのに、その声はすっかり耳になじんでしまっている。だからこそ、声を聞いてし

まったからこそ、寂しさはさらに募った。

もう、この声を聞く機会は当分ないんだと。

そう……わかってるから。

「セラさーん、そろそろ行きますよー」

外からはミーネさんの声。

彼女がメルフェニカの学校まで、ハルを送ってくれることになっている。なお、パメラさんはハルの髪を持って、夜のうちにここを去ってしまった。何というか……忙しい人だ。

僕は家の外に出て荷物をミーネさんに渡し、ハルの頭を撫でる。

言葉はない。

なくとも問題ない。

——がんばっておいで。

ハルはにっこりと笑った。子供らしい、満面の笑みだ。

大丈夫。声にしなくなたって、僕の思いはちゃんと届いている。

「じゃ、出発しまーす」

「気をつけてねー。なんかね、最近メルフェニカは気候崩れ気味らしいからー」

「了解っす」

確認するように、ミーネのドラゴンが羽を上下させる。

軽い上下の運動はだんだんと力を増し、ドラゴンの身体がわずかに浮き上がった。

「あの……!」

ミーネの腕の中にいるハルが、僕とお師匠を見る。

「わたし、がんばる。セラお姉ちゃんみたいな、パメラさんみたい

な魔女に……」

なるから、と。

少し泣いているような声と笑顔を残し、ドラゴンは一気に空へと舞い上がった。下の僕らに挨拶するように何度か旋回し、一気に遠くへと飛び去っていく。

その姿はあっという間に見えなくなつて、そして僕とお師匠だけが残された。

「なんか、寂しくなりますね」

「そだねー」

ふわふわと僕の隣に浮いているお師匠。吹き飛ばされないようにヒトの姿だったけど、いつの間にか元に戻ったようだ。長時間ヒトの姿だったので疲れたのか、ふわりと僕の肩に座る。

「ハルからはねー、いろんなものをもらったような気がするんだよ」
「……そう、ですね」

「これからがんばらなきゃねー」

ハルに負けてはいられないんだよ、と自らを鼓舞するお師匠。確かにその通りだ。

幼い彼女が遠い異国でがんばるのだから、こっちも負けてはいられない。僕は彼女と違って才能が皆無のようだけど、せめて簡単な魔法だけでも使えるようになっておかないと。

……さて、まずは今日のおやつの準備からはじめようか。
腹が減っては戦はできぬ、というしね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542y/>

手乗り魔女と異世界からきた弟子

2011年11月27日14時48分発行